

## 穴門山神社と社叢

川上町高山市にある穴門山神社は、平安時代に編纂された「延喜式神明帳」にも記載されているように、古くから人々の厚い信仰を集めた神社です。

石灰岩台地に刻まれた深い谷間に立地しており、周辺には特異なカルスト地形が広がっています。本殿の背後には石灰岩の断崖絶壁を背負っており、本殿左奥には社名の由来と



本殿(県指定重要文化財)

もいわれる奥行六七の鍾乳洞が口を開けています。

境内のおもな建築物としては、本殿、拜殿(以上、県指定重要文化財)、本門、随神門(以上、市指定重要文化財)があります。穴門山神社は、寛永九年(一六三二)に火災にかかり、この時社殿はすべて焼失しましたが、その後、備中松山藩主の池田氏や水谷氏によって相次いで再建されました。現在の本殿はさらに後、宝暦三年(一七五三)に再建されたものですが、桃山時代の建築様式を取り入れた装飾性の強い建築です。

拜殿も本殿とほぼ同じ頃に再建されたものと考えられています。本門と随神門はやや新しく、いずれも江戸後期の再建と考えられます。拜殿に残された六枚の棟札(県指定

重要文化財)は、こうした再建や修理の履歴を記録した貴重な史料です。

これらの建築物に加え、神社の前面に築かれた高石垣もなかなか見応えがあります。東西六〇㍎、高さ二六㍎におよび、お城の石垣を思わせます。おそらく、これも備中松山藩主の手によって整備されたものでしょう。このように穴門山神社の境内は、史跡としての価値も高いと評価されています。

穴門山神社のもう一つの見所に、社



推定樹齢700年のカツラ

叢(県指定天然記念物)があります。社叢というのは神社を取り巻く森のことで、カツラ、ケヤキ、マツ、イチヨウ、スギなどの巨木が林立する原生林が広がっています。生育する植物の種類も多く、昭和五年の調査記録では実に四三八種にのぼっています。

中でも神社前面の高石垣に沿うようにそびえるカツラの木は、高さ約三〇㍎の巨木で、推定樹齢七〇〇年、県下第三位の大きさといわれており、穴門山神社の社叢を代表する樹木です。

(文・社会教育課文化係長 尾上元規)

